



宇喜多秀家「八丈島物語」

第二回

講談師 一龍斎貞花

勝てば官軍、負ければ賊軍という言葉がありますが、天下分け目の大戦に敗れた敗軍の将に、胸を打つお話がございます。

豊臣秀吉恩顧の武将でありながら、石田三成憎しから関ヶ原合戦に徳川家康の東軍に味方した福島正則。

家康が合戦前約一カ月間に正則に送った手紙が十二通。「尾張内の無管主の地を与える」と甘い言葉で味方にし、合戦後正則を芸備兩州四十九万石の領主に任じます。

慶長八年七月はじめ、福島左衛門尉正則は、関ヶ原合戦三周年の記念として大御所家康公と、新將軍秀忠公へ広島産の銘酒百樽の献上を決め、御用船備前丸に積込み、正席家老吉村又右衛門の指図によって宰領の役を、足軽小

頭大鐘金右衛門に命じ、大鐘身の面目と喜んで部下の足軽十人を連れて備前丸へ。船は順調に進んで参りましたが、八月十五日昼過ぎ、ある島陰に入ってきた。

「船頭、どうしたのだ」

「風が変わりました。二・三日は無理でしょう。旦那これが八丈ですよ」

「おう八丈ヶ島か。誰が住んでおるのか」

「誰も居りません。鳥も通わぬ八丈ヶ島と申しますからね」

「それなら島見物をするでしょう」

部下を連れて八丈へ上陸。嬉嬉として楽しんでおりますうちに、陽も西へ傾いてきた。

「サーー帰ろう」

小舟の待つ岸辺へと、……と向うから歩いて来る者がある。金右衛門

ぎよっとした。

髪の毛はモズの巣のように、身にはボロをまとい歳の頃も見当がつかない。右手には藤曼のようなものへ、生魚五・六匹通したのを持って、ひよろひよろしながら歩いてくる。

金右衛門、つかつかつと側へ、

「これはこれは島人にておわしますか。拙者関東へ参る途中の者でござるが、島に住む人ありとは存せず無断上陸の段お許し願いたい」

「いやいや、わしは島人と申すわけではなし、その詫言には及ばぬことじゃ。だが久し振りに武士の姿を見て懐かしい。その方はいずれの藩士でなんと申す者じゃ」

「ハッ、某は芸備兩州の主福島左衛門尉正則の家来大鐘金右衛門と申します」

「ナニ福島殿のご家来とな。福島殿は芸備の主とご出世か。同じ豊臣の家に育ちし者の出世を聞くは嬉しいことじゃ。帰国致したなら八丈の島で宜しく申した者があると伝えてくりやれ」

「ハッ申し伝えますが、ご尊名をお聞かせ下されませうよう」

「わしの名か、フツツ金右衛門笑うてくれるな宇喜多秀家なれの果てじゃ」

これを聞くや金右衛門後へ飛び下り、「へッへ、世が世であればお目通り叶わぬ軽輩者が、存せぬこととは申し乍ら先刻よりのご無礼の段、お容赦下さりますよう」

「この八丈へ流され、毎日海辺に出ては生魚を手取りして細い露命をつなぎおる凡夫じゃ。死を選ぶということもならずのう。時に関東へ参ると申しだが何用じゃ」

「ハッ、関ヶ原合戦三周年を迎えます
 について主人正則、大御所家康公並びに
 新將軍秀忠公に、清酒百樽献上致します
 その宰領の役を手前致しております」

「十二、関ヶ原三周年とな。成程の
 う。うかうか送る三年間、あの戦はも
 う三年前のことであつたか」

思わずその場に立ち尽くし、はるか
 関ヶ原の方角を臨み感慨無量の態。

「負けるとは思っていなかったあの
 戦、過信していた味方の団結、松尾山
 の金吾中納言秀秋の裏切り行為、敗走
 して歸り津山の城で最後の一戦をと考
 えたが、家來の変心に無念の齒を食い
 しばらねばならなかつた」

心ならずも捕えられるまでの、秀家
 の胸中に去來する三年前とも思えぬ、
 つい昨日のこのように浮かんでくる
 戦の後の夢。

五大老の一人、宇喜多秀家

父直家が亡くなり八歳で家督を継ぎ、
 秀吉の養子となり元服して秀家。直家
 の性病ひどく幼くして親に代り領主の
 役を勤めたともいわれ、十歳で備前岡
 山五十七万石。十五歳で従三位中納言。

秀吉が備中高松城の毛利勢と戦うため
 岡山城へ着陣。ここで秀家の母親で美
 貌のお福、身も心も捧げて秀吉を喜ば
 せ、さらに明智光秀が信長を討った甲
 合戦、中国大返しの時お福が、

「是非岡山城へお立ち寄り頂き、御休
 息を」と招き、お福の歓待に秀吉は疲
 れを癒し、光秀征伐への確信を持った
 というんですからさぞ素晴らしい女性
 だったんでしょう。

大河ドラマ「黒田官兵衛」の中で、
 官兵衛と交渉中、笛木優子さんのお福
 が、陣内孝則さんの直家にしなだれか
 かるシーンがありました。

やがて秀吉は、秀家と養女豪姫（前
 田利家娘）を結婚させ、お福を大坂城
 へ住ませ備前殿と呼ばれ、秀家を可愛
 がることで二人の愛は深まったといわ
 れますから、我が子のために尽したの
 です。母と子の成功物語です。

秀家は、岡山城を大改築。安土城を
 模した天守閣を造り今も烏城と呼ばれ、
 城下町の整備、児島湾の干拓など内政
 に手腕を発揮。秀吉の信任厚く第一次
 朝鮮出兵には全軍の総帥。

「秀吉様の御恩を忘れてはなりません
 ん」の母の言葉を守り、五大老の一人
 として豊臣家を支え、関ヶ原合戦では

福島正則はじめ豊臣恩顧の武将が老獪
 な家康の策に、徳川に味方した中にあつ
 て、秀吉への忠義に燃え関ヶ原の戦い
 に西軍の副将として一万四千の軍勢を
 率いて大奮闘。敗戦後東軍武将たちの

必死の搜索を逃れて地下に潜伏し、徳
 川打倒を果たすべく島津を頼って遠く
 薩摩へ逃れ、島津義弘は秀家を匿った
 が、徳川との和睦に際して秀家を差し
 出だすことになり、それでも家康に助

命を嘆願。家康にしてみれば三成同様
 秀家を処刑したかつたが、妻・豪姫の
 兄前田利長の熱心な助命願いもあり、
 死一等を減ぜられ久能山に追放後八丈
 島へ流罪の第一号となつた。

一般の歴史の中に余り取り上げられ
 ないが、歴史の中でイケメンの秀家と
 して隠れた人気があるのです。

家康は、敵対した輝元の毛利家を潰
 さなかつたのを悔いたともいわれてい
 る。その悔いどおり二六〇年後、毛利
 の長州藩が討幕の原動力になつたので
 す。歴史つて面白いでしょ。

源頼朝を処刑しなかつた平清盛、平
 家はそのため頼朝に滅ぼされ、頼朝は
 自分の体験から弟の範頼、義経、そし
 て木曾義仲の遺児で人質にした義高を
 殺害。現代でも反対派を追放するトツ

プもありますでしょ。存続のためなん
 です。

一椀の酒の所望

「金右衛門、その方に一つ頼みがある。
 関東へ酒を送ると聞いて凡夫の秀家酒
 が一口飲みとうなつた。一椀振る舞う
 てはくれまいか」

「こりゃ、えらい頼みを受けたものだ。
 献上の酒手をつけたら半端物となつて献
 上できなくなつてしまふ。お断り申そう
 か。……しかしながら世に在る時は、備
 前岡山、作州津山の主で五大老の一人と
 して飛ぶ鳥を落す勢いのあつた宇喜多公
 が、いかに世に捨てられしとは申しなが
 ら一椀の酒のご所望とはお勞しい限りで
 ある。よし万一の時には切腹して申し開
 きするまでのこと。……何事かと存じ
 ましたら御酒のご所望。なんでもないこ
 としばしこの処にお待ち下さるよう、直
 ちにこれへ運びます」

驚く船頭を尻目に、一樽小舟に積む
 と秀家の待つ浜辺へ。陽はとつぷりと
 暮れ中秋の名月の中、三年前を偲ひつ
 つ甘露の味に舌鼓をうつお話は次回連
 続に申し上げます。パパン